
ラストワン

雨宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラストワン

【Nコード】
N0964W

【作者名】
雨宮

【あらすじ】
それは、二十五人の姉と一人の妹の物語。

姉妹。

深夜の細い路地に男が血を流しながら一人倒れ、その周りには五人の少女が立っていた。

そろいの白いブラウス。

ブルーのプリーツスカート。

エナメル靴。

まったく同じ装いの少女たちだった。

「死体の処理、やっておいて」

「はい、お姉さま」

にこりと笑う少女。

四人の少女は振り返ることも無く、闇夜へと消えて行った。

残された少女はせつせと遺体を川へと運んだ。

そろそろ夜が明けるな、と遠い空を眺める。

さあ、屋敷に帰ろうと、少女は何事も無かったように歩きだした。

靴裏は血色に染まっていた。

朝食時。

姉妹全員が食堂へそろろう。

その数は二十六人。

全員が同じ顔。

全員が同じ髪の色。

全員が同じ瞳の色。

たった一人、一番端の席に座った少女以外は。

彼女の名前はラスト・スワン

周りは、『ラストワン』と呼んだ。

ずらりと並んだ二十六人は、プラチナブロンドと水色の瞳をしている。ラストを除いて。

二十六人は同じ顔をしているが、見分けることは可能である。誰が誰だかわからなくなるのでそれぞれ髪型を決めているのだ。

真っ直ぐで腰までの少女は七番目の姉であるカエラ。

ウェーブのかかった短い髪の少女は十二番目の姉であるコーデリア。右の耳元で結っている少女は十六番目の姉であるジュリエット。そういう風に、それぞれが自分をわかりやすくしている。

同じ姉妹たちは全員同じ色素を持つが、ラストだけはまったく違う髪の色をしていた。

たった一人だけ、違う髪の色。黒。異質な色彩。それ故、姉たちからは気味悪がられていた。

ラスト本人も、それには気がついていたが何も知らないふりをしにこにこと笑い、積極的に自分から誰もやりたがらない事をやった。姉たちは何も言わなかった。

ラストも黙っていた。

それがいつからか、当たり前前になっていた。

しばらく食堂では静かに話していた姉妹たちだが、メイドがベルを鳴らすと

自分の席へとすぐについた。ラストも自分の席へと行儀良く座る。

ゆっくりとした足音と杖の音が遠くから聞こえてくる。

全員が背筋を伸ばす。

食堂のドアを開かれ、一人の初老の男性が現れる。

ざっと全員が立ち上がる。

「おはようございます、お父様」

そう言い微笑んだのは一番上の上の姉である、リデラ。

一間あけ、残りの二十五人が声をそろえる。

「おはようございます、お父様」

綺麗に声がハミングした。

父

静かな食事が終わり、少女たちはそれぞれの部屋へと戻る。

自分の部屋へ戻る際の散歩がラストの日課でもあった。

この季節は花をつけてはいないが、薔薇の蔓が美しい。

庭へと出る階段には、二人の少女の姿。

ふんわりとしたボブと長いポニーテール。

ラストの気配に気がつき、振り返った顔は同じ。

けれど性格は、少しずつ違っている。

「ラストワン」

そう名前を呼んだ八番目の姉ティーベ。

ラストは軽くお辞儀をする。

「ラストワンは散歩？」

「はい」

そう答えると、階段から見える庭へと目をやる。

緑に彩られた庭園は綺麗に手入れされている。

「それにしても昨日はしんどかったなー」

肩をぐるぐると回しながらため息と共に十四番目の姉ビアンカが言う。

あからさまに疲れたということを仕草でアピールしてくる。

「お疲れ様ですお姉さま。紅茶でも入れましょうか」

「あなたみたいな出来損ないに、私たちの口に合う紅茶が入れられるわけないでしょ。行こう、ティーベ姉さん」

ラストワンの横を目を合わすことも無く、行ってしまう。

素っ気無い態度、それがラストにとっては寂しいことであった。

自室までに数人の姉とすれ違ったが、ことごとく無視。

いつもの事なので慣れていた。

ラストの願いは一つ。

姉妹全員で仲良く暮らすこと。
叶うことはないだろうなとは、心のどこかでわかつてはいた。

屋敷は広く、部屋は無数にある。
姉妹にはそれぞれ一部屋ずつ与えられている。

広い階段の踊り場、落ち着いた談話ルーム、日が差し込むテラス。
大きな庭園の他にも中庭や温室などもあり、緑が豊富だ。

ただ一つ普通の屋敷と違う所がある。

それは巨大な射撃訓練所と武器庫。

姉妹の『お仕事』演習をするために作られたもので、毎日使われている。

実戦的な訓練をするための建物や、複雑な構造の射的場。

ラストも足を運び銃器を実際に扱うことが無いラストも、体が鈍るからと毎日訓練を受けている。

ただ的に合わせてトリガーを引くだけ。

簡単なことだ。とても。

姉妹関係もこうだといいいのにと、ラストはいつも思いながら撃ち続けていた。

『お仕事』と、姉妹の間では呼ばれている行為。

それはメイドが父から預かってくる書類の通りに行動することである。

多くが誰かしらの命を引き裂くという内容で、姉妹は武器を手にする書類通りに『お仕事』をする。

それが自分たちに唯一、父を喜ばせることが出来ることだと信じているからだ。

幼い頃から父のために何かしたいと思っていた姉妹たちは、武器を与えられ、喜んだ。

これで父の笑顔を見ることが出来る。父に褒めてもらえる。父に特別扱いしてもらえる。

ただその思いだけで、人を殺すという事を悪とは思わなかった。父が望む事ならば躊躇わなかった。姉妹にとって、大切なのは、父と同じ血を分けた姉妹だけ。他の人間になど興味は無かったのだ。

開けておいた扉をノックする音。

基本、眠る時以外は開けている。

姉妹同士が行き来しやすいようにするためにだ。

しかしラストの部屋を訪ねてくる姉は、誰もいなかった。

ラストワンも、姉たちの部屋へ向かうことは避けていた。

好かれていないどころか、むしろ煙たがられている。

『お仕事』でもラストは後ろで見ているだけのことが多い。

そして帰りに『お仕事』の後片付けを手伝うだけ……。

「ラストワン」

はっと顔を上げると、そこには父がいた。

慌ててラストはスカートのプリーツと、胸元のリボンを整える。

本に書かれた手本のように礼儀正しい仕草で挨拶をする。

「ごきげんよう、お父様」

父はなにかと忙しく屋敷にあまりいることは無い。

屋敷へ戻っている時も絶えず誰かしら姉が側に居て、近づきがたかった。

そのため、二人きりで話したことはほんの数回しか無かった。

どう接すればいいのかわからず戸惑ってしまふ。

言葉をもごもごと探していたラストを察したかのように父が口を開いた。

「何をしていた」

ふいに聞かれ、驚く。

父は自分には全く興味が無いと思っていたからだ。

事実今まで親子らしい会話などしことは無い。

「武器の手入れですっ」

少し声が上ずってしまい、口元に手を当てる。

「そうか」

「はい、お父様」

にこつと笑って首を傾げる。

するとなぜか、父はそれまでの鉄面皮を崩し悲しそうな顔をした。

何事かとラストは驚くがどうすることもできずにいると、ついに父は瞳からぼつりとぼつりと涙をこぼし始めた。

涙を拭うことも無く、ラストの両肩を優しく掴み視線を合わせる。

その瞳の色は灰色を帯びた青。

顔をくしゃくしゃにしながら、父が声を絞り出すように言う。

「お前には苦労をかけてすまないと思っっている、もう少し待ってくれ」

「苦労、ですか？」

きよんとするラスト。

父に心配をかける程の苦労など、思い当たらない。

「時機にわかる」

「はい」

静かに答えると父はやつと涙を拭き、ラストの頭をそつと撫でた。

こんなに嬉しいことがあつただろうか。

考えながらラストは泣いた父に微笑んだ。

それが、ラストが父を見た最後の日であった。

お仕事。

朝食後に一番上の姉、リデラがメイドから一通の封筒を受け取る。
みな背筋を伸ばす。

その封筒は『お仕事』の内容が書かれたものである。

ペーパーナイフで封筒を開け、中の紙に目を通すリデラ。

誰の名が呼ばれるか緊張する瞬間だ。

「メンバーは、アデル・フィオ・カサンドラ・ラストの四名、リーダーはアデル」

そう言くと、封筒と紙をアデルへと渡す。

アデルは一礼しそれを受け取る。

この後、名前を呼ばれた四名は『お仕事』についての説明を受け、準備をする。

他の者は変らぬ日常を過ごす。

ラストと三人の姉は食堂に残り、それぞれの役割分担を相談する。
だいたい誰がどの役を担うかは決まっていたが。

簡単な話し合いの結果、カサンドラとフィオが対象と接触、アデルは指示、ラストは後方サポートとなった。
いつもと変わらない配置である。

日も沈み月が支配する時間。

四人は屋敷を出、書かれていたポイントまで駆け足で移動を開始する。

目的ポイントは街外れにある倉庫の一角だった。

フィオはショットガンを構えては下ろす動作を繰り返し、

カサンドラはハンドガンをくるくると回しながら持て遊んでいる。

時計を見ていたアデルが告げる。

「そろそろ時間ね、行動開始」

「了解」

「はいよう」

「はい」

三人はそれぞれ返事をし、それぞれの待機場所へと散る。

しばらくすると長身の男性らしき影がラストの目にも入った。

すでにフィオは狙う体勢に入っているだろう。

相手はこちらの気配に気付く様子は一向に無く、ただうろろとしていた。

ラストは疑問を持つ。

何者なのだろう？なぜ命を狙われているのだろうか？

家族はいるのか、歳はいくつか、どんな仕事をしていて、趣味は何か。

しかし誰に聞くわけにもいかず、黙って見ていることしかできない。ズガン！という音と共に、男の体が無残にも吹き飛ぶ。

上半身は跡形も無い。

ラストの横で暗視望遠鏡を覗き込んでいたアデルは顔を上げ、ピユイと口笛を吹く。

撤収の合図だ。

フィオとカサンドラが戻ってきた所で、今日の『お仕事』は終了となった。

今回は死体については放置と記載されていたので、ラストはただ立っていただけであった。

そのまま屋敷へと四人は戻り、自室へと分かれた。

ラストは自分の部屋へと戻ると、服をネグリジェに着替え机に向かった。

今日の出来事をノートに簡単にまとめる。

それが終わると、体をほぐすストレッチを一通りし、明かりを消してベッドへと潜り込んだ。

暗闇の中、しばらく瞬きを繰り返してゆっくりと眠りへとついた。

今日死んだあの人は一体何者だったのだろうか、考えてはいけな

いと自分に言い聞かせて。

異変。

朝。

いつも通りラストが朝食の時間に食堂へ向かうと、とても信じられない光景が広がっていた。

一番上の姉である、リデラの動かぬ体を抱き泣く三番目の姉アリーナ。

その横に座り込み目を見開いて呆然としている、二番目の姉エット。それを黙って囲む姉妹たち。

何が起きているのか、まったくわからなかった。

しばらくし、やっとアリーナが落ち着きを取り戻すと、リデラの体をそつと寝かせた。

姉のリデラは額を打ち抜かれ死亡していた。

美しい等身大の人形のようにもあった。

だらりと腕が床へたれている。瞳と口は閉じており、ただ眠っているだけのようにも見えた。

しかし二度とリデラは目覚めることは無い。

「……誰が、こんなことを」

「なぜリデラお姉さまがこんなっ！こんなお姿にならなければならないというの！」

「みな落ち着きましょう……」

そう言ったのはまだぼんやりとしている二番目のエットだった。

現段階で、指揮権は二番目の姉であるエットへと移ったのだ。嫌でも彼女が仕切らなければならない。

「お父様に、連絡を、しないと……」

声が震えている。

「旦那様とは現在連絡が取れていません」

冷静にメイドの一人が答える。

ゆつくりと振り返るエツト。

その顔は冷たい怒りに燃えていた。

「……今、なんと言った」

「旦那様とは現在連絡がと」

バンツと爆発音がすぐ近くで鳴り、ラストワンは耳が痛む。

何が起こったのか一瞬わからなかったが聞きなれた音だ。

銃声。

エツトがメイドを撃った。

どさりと倒れるメイド。

他のメイドたちは驚いたが、誰も悲鳴を上げたり駆け寄ったりはしなかった。

エツトも強く自分の拳銃を握り絞めながら氷のような視線で撃ち殺したメイドを一瞥しただけだった。

「まずはお姉さまへの追悼を、それからお父様に急いでお知らせしなければ」

そうエツトが言うと、静かに姉妹たちは円状に並び、手を繋ぎ輪を作る。

その中心に、手を胸の上に置いて横になっているリデラ。

「最愛のお姉さまの死を、私たちは忘れません」

姉妹を代表しエツトが別れの言葉を口にし、全員で黙祷を捧げる。すんすんと鼻をすする音が聞こえる。

誰だかはわからないが、泣いているのだろう。

ラストも少し俯きながらリデラのことを思い出す。

一番上の姉ということでの姉たちを束ねていた。

親しい姉ではなかったが、ラストのことを気にはかけてくれており、時折話しかけてくれた。

思い出すと、少しだけ涙が出そうになるが胸が苦しくなるだけでラストは申し訳なくなる。

もう二度と会えないのに。

けれど哀しみはそれで終わらなかった。

次の朝、ラストが目覚めたのは、激しいノックの音だった。何事かとベッドから抜け出し上着を羽織って廊下へ顔を出すと、他の姉たちが早足で外へと向かっていった。ラストも姉について行くと庭へと出た。足裏が冷たかった。

庭園の白い花が絨毯のように敷き詰められた花畑。そこに居たのは、胸を血に染めた姉のエットだった。

白いネグリジェに広がる赤い模様。

ただでさえ色素の薄い肌は青白い。

昨日死んだ一番上の姉のリデラとまったく同じ表情で、花畑で眠っていた。

永遠に覚めることの無い眠り。

誰も何も言わずに、エットを囲む姉妹たち。

全員が口を噤み、その姿に黙って見入っていた。

まるで絵本のようなだった。

王子様が口付けをすれば、蘇りそう。再び薄いまぶたが開きそうな気がした。けれど赤黒い染みはそれを否定している。

そして死の連鎖は始まった。

死の連鎖。

数日の間に、次々と姉たちが遺体となって見つかった。朝起きると上から順番に一人ずつ、いなくなっていた。

その朝は九番目の姉エラーラと十番目の姉ウェルスが手を繋ぎ寄り添って死んでいた。

二人は特に仲の良い姉妹でいつも一緒だった。

『お仕事』でも常にペアを組んで行動し、屋敷の中でも並んで歩いていた。

お互いの髪を結いあい、そろいのリボンをつけていた。

そんな彼女たちは死ぬ時まで、一緒であった。

ラストは死んでもこの二人の魂は共にあるのだらうと、思った。

神を信じてはいないが、どうか安らかであれと心の底から思った。

「一体何が起こつてるといふの」

食堂で十一番目の姉シノーベが俯きがちに言う。

二人の遺体を埋葬し、姉妹全員が食堂に集まっていた。

ラストも他の姉たちと同じように、隅の席で黙ってシノーベを見ていた。

姉妹をまとめるのは、一番上の姉と決まっている。

これまではずっと最初に死んだりデラが務めていた、だがその姉も今は居ない。

シノーベはあまり積極的な性格ではなく『お仕事』でも後方援護担当である。

はつきり言ってしまうえば、他の姉たちよりも頼りに出来ない。

だが年功序列制を取っているため、シノーベが仕切るしか無いのだ。不安が無いと言えは嘘になるだろう。

きつと明日はシノーベが死ぬのだ。

姉妹の誰もがそう感じていた。

いつか、自分の番が回ってくると。

きゅつとラストはひざの上で拳を強く握った。

もう、これ以上姉を一人も亡くしたくはない。

けれど自分に何が出来ると、何と考えると、何も出来ないとすぐに答えが出てしまう。

確かに冷たい態度をとる姉もいるが、それは自分が劣っているからだと理解している。

姉たちはみんな愛おしい。

大切な。

泣きそうになるのを堪える。

みんな辛いはずなのに、ここで泣いてしまえば余計に嫌われてしまうだろう。

なんとか平常さを保ってはいるシノーベはすごいと思った。

その顔を見るのも、今日で最後かと思うと胸が痛んだ。

なんとかして止めたいと思った。

誰も死んで欲しくなかった。

以前のように二十六人そろって朝食を食べたかった。

もう無理なんだとわかっていても。

その時だった。

一人のメイドが食堂へ入ってきた。

入り口で一礼し、シノーベの元へ静かに歩いていく。

姉妹たちは何事かとメイドを見る。

手には何か紙を持っていた。

メイドはシノーベの後ろに立つと、姉妹全員を見渡す。

「旦那様のご遺体で発見されました」

「どういう……こと……」

がたとシノーベが立ち上がる。

ざわっと姉妹たちの間に動揺が広がる。

ラストワンもわけがわからない。

姉たちだけではなく、父までもが？なぜ？何のために？

謎だけが増えていく。

「研究室で首を吊って亡くなっていたそうです」

付け足すように冷静にメイドが言つと、それまで信じられないと

黙っていた姉たちが騒ぎ始めた。

「そんなはず無い！」

「なぜお父様がっ」

「証拠があるの！でたらめを言わないで！」

あちらこちらから口々に否定の声が上がる。

メイドは表情一つ変えずに立っていた。

「こちらが残されていた遺書です」

そう言い、手にしていた紙を広げてみせる。

大きな白い紙に、黒いインク。

そこには走り書きで大きく一人の名前が書かれていた。

『ラストワン』

と。

全員の視線が、いっせいにラストの方へ向く。

それはとてつもない恐怖感。

ざっと全身の血が下がる。

わけがわからない。

ただ、今この瞬間に、空気が哀しみから殺意に満ちたものへと変化した。

「……どういうこと、ラストワン……」

低く怒りを押し殺した声で問われる。

答えなど、持ち合わせてはいない。

ラストはそんなばかなと首を左右に振り否定の言葉を搜すが、あま

りの事にのどが詰まる。

「何か言いなさい！」

「あなたがお姉さまたちを殺したのっ?!」

「ラストワン!!」

大きな声が、食堂に響き渡る。

頭がぐらぐらとして、気持ちが悪くなる。

なぜ怒りの矛先が自分へ向いているのか理解できない。

どうすればいいのかもわからない。

ただ何も言えずに姉たちの非難を浴びることしか出来なかった。

思考が止まり固まっていると、見かねたように一人の姉が立ち上がる。

「みんな落ち着きましょう！」

十八番目の姉ベリンダが、仲裁に入ってくれたのだ。

しかしベリンダはラストの方を向いて厳しく言った。

「ラストも何か言いなさい！」

はっとする。

何も言わずに黙っているのは肯定していることと同じである。

自分が姉と父を殺したと、認めていることになるのだ。

それだけは違う。

「私は何もしてない、誰も殺してなんかいない」

小さな声だったがはっきりと強く言い切った。

姉たちは黙り、再び食堂に静けさが戻った。

今度は凍りつくような静けさが。

「ラスト、さっき言ったことは本当ね？」

ベリンダが念を押すようにたずねてくる。

ラストはしっかりとうなづく。

「誓います」

真っ直ぐにベリンダの目を見つめて答えた。

ベリンダも数秒、ラストの目をじっと見つめた後、頷いてシノーベの方へ向く。

「だそうです、シノーベお姉さま」

ベリンダは会話の主導権をシノーベへ渡す。

他の姉たちもやっと納得したようで、ラストへそれ以上の追及しはしなかった。

姉妹間での信頼は厚い。それはラストを含めてである。

嘘をつかない、真実を正直に伝える。

それが姉妹たちでの約束だからだ。

「私はこのままだと明日殺されるわ」

深刻な声で、シノーベが言った。

順番でいけば、確実に次は彼女である。

誰もがわかつている事だったが何も言えなかった。

順番。

「ラスト、ちょっといいかしら」

朝食後部屋へ戻ろうとした所をベリンダに呼び止められた。

「何でしょうかお姉さま」

「心当たりは本当に無いのね？」

真面目な顔でそう聞かれ、ラストは少し傷つく。

先ほど自分の見方をしてくれたと思ったのは、ただの思い上がりでしかなかったのだ。

ベリンダは正義感の強い姉で、何事もはっきりとさせたがる性格である。

しかしそういった所がラストは好きであった。

「はい、ありません。どうしてお父様が私の名前を書いたのか、知りたいです」

「そう……」

ベリンダはしばらくその場で考え込む。

「とにかく今はシノーベお姉さまをなんとかしなければならいわね」

「私もそう思います」

ラストが同意すると、ベリンダは頷く。

「お姉さまと少し話しをしてみるわ。後、あなたには悪いけれど、これ以上騒ぎを大きくしないためにも自分の部屋になるべく居てちょうだい」

てきばきと話す。

「それが一番だと私も思います」

「ごめんなさいね」

ベリンダは気まずそうな顔をしながら、ラストの頬をそつと撫でた。

優しい感情が、指先から伝わってきた。

ラストは自室へ戻り、再び考える。

一体誰がラストたち姉妹を順に殺し父親までも殺したのか。まったくわからない。

けれど思い当たることが無いわけではなかった。

それは普段行っている『お仕事』。

人の命を何とも思わず奪う行為。

ただ父のために、姉妹と一緒に、指定された人物を殺す。

それはなんとも罪深き事である。

わかつてはいた。わかつてはいたが、どこかでそれを正当化していた自分がいた。

反対の事が起こってもおかしくは無いのだ。

ラストは自分の考えが甘かったことを悔やむ。

平然と、人を殺してきたのだ。人を殺しているのを黙って見てきた。自分が死んだら地獄という所へ行くのだろうなと、ラストワンは思った。

死は怖いが、避けられぬものだ。遅かれ早かれやってくる。

逃げるつもりはなかった。

数日後には自分の番が回ってくるだろう。

覚悟は出来ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0964w/>

ラストワン

2011年12月20日19時48分発行